

おはようございます。

皆様、今日の答唱詩篇になんと書いてありましたか？「神が訪れる人の顔は輝く」とありましたね。そうです。もし、私達の顔に輝く何かが無かったら、神様にまだ出会っていない証拠かもしれません。おそらく、その輝きは信仰によって与えられる喜びではないでしょうか。信仰の喜びの笑顔によって、自分もまわりの人達も癒されます。

3週前の説教の中で「私の信仰はまだまだです」という謙った心を持つのが望ましいと申し上げましたが、今日のイエス様の“たとえ”もそういうものですね。よく見てみますと、この“たとえ”にはおもしろいところがあります。

神殿に祈りに来た二人の人。ファリサイ派の人と徴税人。立場が違う二人は、祈りの内容も全然違いました。ファリサイ派の人は「私は奪い取る者でなく、不正な者、姦通を犯す者でもなく、あの徴税人のような者でもないことを感謝します」と、自分の正しさを言いました。祈りというより主張するような感じでした。しかし、もう一方の徴税人の祈りは「罪人の私を憐れんで下さい」というものでした。そして、イエス様は「この二人の中で義とされたのは徴税人だ」と話されました。

私たちは既にファリサイ派と言えば、否定的なイメージを持っているので、自然にこの例えを受け入れるかもしれません。しかし、よく考えてみると、少しおかしいところがあります。実際にファリサイ派の人が言った生き方は、模範的な生き方そのものでした。奪い取ることのない生活、即ち正しくお金を儲けたことを意味します。不正ではない生活、即ち信仰の掟を守ってきたことを意味します。姦通を犯さない生き方、即ち誘惑にいつも狙われている今の時代を考えてみても、時代と関係せず、まじめに生活したことを意味します。その上、週に2回断食もしていると言っています。このような生き方は普通の人なら出来ないかもしれません。しかし、イエス様の反応は厳しかったですね。むしろ、遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら「神様、罪人の私を憐れんでください」と祈った徴税人が義とされて家に帰ったとイエス様は話されました。それでは徴税人とは、どういう人だったのかを調べてみましょう。あの当時のユダヤは、ローマ帝国の植民地でした。徴税人は自分と同じ民族からお金を取り税金としてローマに渡し、その報酬をもらいながら富を積んだ者でした。ですから、ユダヤ人に裏切り者と嫌われるのは当然のことでした。実際に正しい生き方を拒んだ生活をしていたのでした。

ではなぜ、イエス様は正しい生き方を見せた人より、正しくない生き方を見せた人を選んだのでしょうか。イエス様の思いは違っていたのです。イエス様がこの例えを通して仰ったのは、表面的に表れる生き方についてではなく、心についてでした。人間はどんなに頑張っても罪の環境に縛られています。この世にいる間は仕方ないかもしれません。正しい生き方をしようとする心、しかも「私はあなたに罪を犯しました」という真実な悔い改め。その姿をイエス様は強調したわけです。

ファリサイ派の人は、表面的には自分を満足させるくらいに掟通りの生活をしたのですが、それによって他人を見下すきょう慢に落ち、一番大事なことを見失ってしまったのです。もし心からの思いで断食していたのなら、このように生意気な祈りはしなかったでしょう。心から悪を退けて、誘惑を避けていたのなら、このように他人を見下す態度を見せなかったでしょう。逆に、いつも自分の仕事が信仰の掟に逆らっていることをよく知っていた徴税人は、ただ「憐れんで下さい」という祈りしかできませんでした。謙る心そのものでした。神の前で自分の弱さや罪深さを認めて祈っている姿でした。

自分が正しい人間だと思ふ人の陥りやすい罠は何でしょうか。それは自分と同じような生き方をしない人を批判することです。「なぜあの人はこうしないのか」と。

今日の福音と似た話で、マルコ 12 章 41 節から「やもめの献金」というのがありますね。賽銭箱にお金持ち達が大金を献金しました。しかし、やもめはほんのわずかな献金だけしかできませんでした。これをご覧になったイエス様は「一番たくさん献金したのはこのやもめである」といわれました。金持ちのありあまる中からの献金より、やもめが乏しい中から精いっぱい献金をしたので、誰よりもたくさん献金をしたと言われたのです。

話は少し違いますが、私は以前から気になっていることがあります。ミサの中の献金の仕方についてです。献金の時になると急にお財布を取り出して適当なお金を捜して入れます。まわりの人を気にしているようにも見えます。日本には美しい習慣がありますね。お金を差上げる時、美しい袋に入れて心からの気持ちを表すでしょう？ 今、評議会で献金用の袋を用意しようかと検討していますが、一週間のことを感謝して家で準備してくるべきではないでしょうか。1円でも1万円でも、自分でできるだけでいいのです。入れるお金のない人は心だけ入れて下さい。祈りながら心を込めて献金しましょう。あの方（イエス様）は本当に心が欲しかったのです。御父である神様もそれを願っていることを知らせたかったのです。

生きる目的について、はっきり知って欲しいです。それがイエス様のみむねです。

時々、聖書をどのように読めばよいのでしょうかと質問されます。どのように準備した心で読んだらよいか。

神様のみむねが表れること、専門用語では「啓示」と言います。聖書、特に福音書はイエス様のみむね、つまり神様の御心を表しています。どのように表しているかというと、神様は必ず誰にでもわかる人間的なやり方で表わされます。神的な方法ではありません。ですから、できるだけイエス様の人間的な美しさ、生き方の美しさについて黙想して下さい。福音書を読めば読むほど、イエス様の人間的な魅力に感動することになります。その後、イエス様の霊的なところまで接近できます。

疲れている時、人間味のある人に会うとほっとしますね。完璧な人間味の持ち主であるイエス様に会ったらどうなるんでしょうか。このような言葉があります。「キリストの香り」。香りには人が集まってきました。それは口や顔から出るのではなく、どういう心を持っているかが表れるのです。キリストの香りがすれば、その人のことが好きになり、その人を真似して生きたいと思うでしょう。キリストに従っている私達にもその香りが出るようになって欲しいです。神様に求めたら下さるでしょう。祈りって、それは人間が神様に願うことを意味します。しかし、逆に神様が私達に祈っているかもしれせん。それは「愛する者よ、ぜひ正しい心を持って欲しい」というものではないでしょうか。

ご聖体をいただくことも同じです。どのくらい準備した心でイエス様をいただいているのでしょうか。本当にこれがイエス様のお身体であると信じながらいただいているのでしょうか。もし心に何か気にかかることがあったら、ゆるしの部屋に入って下さい。誰かと喧嘩してしまったら、ゆるしの部屋に入って下さい。このような心でご聖体をいただきましょう。

また新しい一週間が始まります。意味を捜しながらいきましょう。

ありがとうございました。